

元気の源

黒々とした幹と松葉の間に、青い空がのぞく。10月末、兵庫県立舞子公園(神戸市垂水区)の松林を訪れた樹木医の河合浩彦さん(74)は、いつも持ち歩いているメジャーで幹の太さを測り、ごっこつした木肌をいとおしそうになつた。「天下の名木も路傍の木も同

樹木医

河合 浩彦さん 74

樹木いきいき笑顔咲く



舞子公園のクロマツへの思いを語る河合さん(神戸市垂水区で)＝里見研撮影

じ。彼らが元気になるなら、何だっつてします」
古くから歌に詠まれた白砂青松の名勝・舞子浜。害虫や海風による塩害などで戦後失われたクロマツの林は、1965年から始まった県の植栽事業で1800本超にまで戻ったが、再び生育不良で枯れる木が目立ち始め、昨年、約200本の伐採が決まった。
決断したのは河合さんだ。県の依頼で松林を診断。日照不足が原因のため、一部を間引き、被害を食い止めようと考えた。「木の命を助

けるのが樹木医なのだ。……」。2か月間悩み抜き、「松林全体を一本の木と捉え、剪定するんだと自分に言い聞かせた」と語る。
植物に関心を抱いたのは4歳の頃、父親が買って来た桃だった。種を植え、芽が出るまで毎日観察、7年後に実をつけた。興味が膨らみ、中学生で植木屋になると決心。63年に東京農大に入学し、卒業後1年間、米国で造園技術を学び、神戸市内の造園会社に就職した。93年、樹木医の資格を取得した。「木を傷めない造園がしたい」と



サクラの管理や剪定技術について県内外の樹木医に説明する河合さん(中央)。知識と経験を後進に伝えることにも力を入れている(神戸市灘区の王子公園で)

格言

樹木医も万能ではなく、対処に悩むこともあるが、まず実行することが大切。並行して、人の意見を聞いたり、専門書を読んだりし、検証しながら治療をすすめるよう心がけている。

実行しながら考える

地域×ライフ

舞子公園管理事務所課長

児嶋稔さん(48)

「気やへい何でも相談できる人柄。私が事務所へ赴任してきた4年前から、無償で、園内全ての植物を診て

仲間から

もらった。職員への指導や研修をしてもらっています。台風の時、職員は誰よりも朝早く来て、園内を見回すなど、その姿勢には頭が下がります」

木を見ながら歩く

お気に入り

10年ほど前までは月1回、六甲山などを5時間かけて歩いていたほどの健脚。最近はその機会が減っていたが、目が悪くなり、今年6月に車の運転をやめたため、また歩くようになった。
通勤や樹木の治療のため1日に

2時間ほど。「不便もありますが、それを楽しむ心境ですね」。街を歩いていて自然と視線が向かうのは、道端の木だ。「『あの根の植え方はまずいな』とか、ひとりで分析しながら歩くのも、一興なんです」

思うようになったからだ。91年に民間の資格認定が始まったばかりで、同市で初の合格者になった。忘れられないのは、その2年後の阪神大震災。被害を受けた名木や老木の治療に奔走する中、驚かされたのはその生命力だった。「長田の大火」で焼けた公園の木々は死なずに、その春、芽を吹いた。「早期復興を果たせたのは、植物から希望をもらったから」。街を眺めるたびに、そう感じる。
約20年前、小学校の校庭で枯れかけていたクスノキを治療し、数年後に青々とよみがえった姿を当時の児童が絵に描いてくれたことは、大切な思い出だ。「『木が生き返った』『初めて花が咲いた』と喜ばれるのが一番うれしい」
自治体の依頼などを受け、県内各地の樹木の治療や研修に飛び回り、顧問を務める造園会社では、後輩の相談にも乗る。「好きなことを仕事にできて、こんな幸せはない」。樹木をよみがえらせ、その木から元気をもらう。そんな幸福な循環をかみしめている。
(神戸総局 森大輔)